

大平総理の人柄

長尾頼隆

大平氏の人柄については、彼自身の著書を始め、亡くなられてこの方幾多の方の回想録や彼の思想等で語られた実に立派な著作で日本は勿論、外国の要人にまで十二分に知れわたったように思う。今更、私如きが述べるのもどうかと内心忸怩たるものがあつたが、以下の二つの事が私の脳裡に浮かんだので、執筆をお引受けすることにした。

その一つは、高松へ我が家の墓参りで帰省した折、丁度よい機会とかねてから大平氏の郷里へ是非参りたく思い、田舎の盆の混雑を避け、早目の七月二十一日、まず観音寺の大平正芳記念館を訪ね、実に多くの記念の品々を拝見し感慨に耽つたのである。その足で豊浜の墓地へ参詣した。墓は豊浜の海岸を一望に眺める景勝の丘にあり、厳然と一つ建っていた。前面の広い砂浜は豊浜町民の墓地で、数えきれない程の墓石が並んでいる。彼の墓は墓守りの管理が行き届き、一對の華麗な花がキチンと供えられ、爽々しい氣持に浸ることができた。余談だが高松 観音寺間の鉄道特急も昔とは変つて非常に早く、車輛も心持よく四十分程度で到着した。その直後の執筆依頼なので、私は大平氏直々の依頼とも思つたのである。

その二つは、私は高松高商六回生卒業で大平氏とは同期である。大平氏のご承知の方も多いが、高松高商五回の入学で病氣休学で六回の卒業である。卒業生の会を「又信会」と称するが、五、六回生にとつては殊のほか大平総理の出現は大きな誇りで、その中でも有志が東京と大阪に数名いた。残念にも大平氏死

去前後から鬼籍に入る人が続き、今、生存者は私一人という寂しさで、何か書いて功德の一つにしたい気が持したのである。

大平氏を偲びつつ、彼の人となりを書かせていただく。

学生時代

大平氏は高松高商時代、色々と悩みをもつて過された気がする。当時の日本の家庭は、現在とは比較にならぬぐらい生活水準が低かったので、能力あるものほど進学には相應の悩みをもっていた。いわば、これは青少年に共通の希望が多い為でもある。私も学校選択で、親との意見相違で悩みをもっていた。また氏が独り信仰に凝ったのも、悩みの為ではあるまいか。

私は高松高商二年の時、大平氏と一緒にだったが、余り親しく話し合ったことはなかった。むしろ第二語学を独乙語にしたので、その連中の野沢胖君や太田誠三郎君達とは昼休みによく会話を共にし、太田君とは独乙語劇と一緒にした思い出がある。また私達高松に実家のある連中は放課後も早々と下校し、大平氏がイエスの僕会で伝道に熱心なことは屢々聞いたものの、実際にその姿を見る機会がなかった。

ただ特記したいことは三年生の初冬の折、大平氏と同期の橋本清君がある休日、屋島へ散策の途次、突然、拙宅を訪ねてくれたことである。私の実家は中級の商家であるが、母の奥への案内も辞せられ暫く語り合った時、私の一橋志望をそれとなく羨しく思うような発言をされたが、これは橋本君も神戸商大へ進学することになっており、何となく取り残された寂しさか悲しさが、胸中あつたからかも知れない。これは後で著書で知ったが、すでに大平氏も一橋大への入試手続をなさっていた由で、その時の大平氏の気持を察して、私は読書後、心中が痛く心に響いた。

因みに大平氏の親友であった神原龜太郎君も一橋志望で、共に受験勉強をした仲である。後に神原君は

大阪で立派な実業人となったが、神原君への大平氏の弔詞はまことに切々たるものがあつた。神原君の令弟武雄氏は神戸商大を出て、後年、長く又信会大阪支部長を務められ、兄弟揃つて又信会に尽された。

昭和七年の卒業時は不況で、恰好の就職先も余りなかつた。私は親類の事業を手伝つという話もあつて就職事情に関心がなく、幸い一橋に入学できて、すっかり人生航路が変わつた。人の一生は全く判らないと沁々思う。

私の東京商大入学前後から卒業の頃は、大平氏の著書にもあるように、満州事変後の軍の要望もあり、自由経済が統制経済に入りつつあつた。そのため経済学科出身者の中央官庁への要望が高まり、経済官僚が囑望されていた。また私の大学ゼミナールの内池廉吉教授は東大講師もしていたが、官僚への熱心な推進者で、そのために学中の高文受験を大変すすめられていた。

私の二年の時、大平氏が入学してきた。彼も高文試験を志していたので、私と二人で大学の構内を散策しながら試験のことで問答もした。私の吉祥寺の下宿先にもよく訪ねてきてくれた。私も国分寺の彼の下宿に寄つたりしたが、同地には先輩の赤城猪太郎君はじめ幾多の学友も居合せたので、何かと話題に花が咲いた。

当時は商大内にも新進の田上穰治助手を中心に法学研究会が生まれ、大平氏の年次の者から入会者が多くなつたと思う。氏は念願の高文準備は勿論、経済哲学や経済史等の講義にも進んで受講され、英語を得意とする者が入る上田辰之助教授のゼミナール入りをして文字通り猛勉強をしており、一番充実した学生生活であつたと思う。

一般論だが、当時の学生は揃つて熱心に勉強をした。私の昭和十年組も大平氏の十一年組も、なかなか多士済々である。また商大は単科大学のせい、年次別会が盛んで、親密度も大変深い。大平氏は昭和十一年会にもよく出席されたようで、後々まで同期生からも大層感服されていた。実に友人を大切にされた。

昭和十年以降終戦時まで

私は昭和十年一橋大学卒業と同時に鉄道省に就職した。間もなく事務系九名と共に北は私鉄から西は門鉄（当時東鉄と大鉄へは配置せず技術出身者十八名は別の見習）へと地方へ配属された。当時の学士の教育で、まず現場（駅等）への転動を命ぜられた。

昭和十一年四月、大平氏は大蔵省へ入られたが、私は同年二月二十六日いわゆる二・二六事件の当日、奇しくも彼の寄宿先を訪ねたことがある。私は当時下関駅の見習を終え、下関車掌区助役の身分で下関駅朝出発の、当時の最優秀列車八列車（下関車掌区が受持で一等連結で朝鮮、満州大陸の玄關として下関駅は殷賑を極めていた）で上京したのである。このクーデターの朝、沼津通過頃から刻々情報が入り、大変な警戒中なので緊張して到着した。しかし中央線の電車は案ずる程もなく無事、中野の大平秀雄氏宅におられた彼を訪ねたのである。大蔵省就職を祝うためである。

この機会に、大平氏の著書で横浜の税務署長時代の差押えはり紙のこと、仙台の間税部長時代の東北でのドロクの話等を読んで、庶民の気持ちに痛く同情した彼らしい優しさに敬服したが、私も実は同じ体験をしている。下関車掌区の時、列車内検札をしたが、下関発急行列車は当時、韓国人の乗車も多かった。とりわけ同国の経済事情は日本より相当低く、阪神地方への出稼ぎ労働者も多かった。日が経って妻子を呼び寄せるためか、何となく見劣りのする姿の韓国人妻子をよく見かけ、検札すると急行券所持の者も居合せた。私は、この人達の急行料金徴収が余りにも気の毒で、見ぬふりをして検札を見過したこともあった。私自身、大平氏の本を読んで、若き日の純情に内心、安堵感に浸った次第である。

昭和十四年六月、大平氏の蒙疆政府出向を下関で見送った私は、同年九月東鉄に移り、そしてその後、本省経理局主計課首席事務官を経て、終戦直前、新設の四国鉄道局総務部長になった。

戦前、東京在勤中はお互いが官界に勤めていることもあって、時々会う機会もあり、特に私が主計課事務官当時は、大変な頻度で大蔵省主計局に向向いた。時間を割いて大平氏の席へも行ったりした。

或る日、東京駅の食堂で会食した折、大平氏が大きく重そうな蓄音器を肩に担いで現れた。少々驚いたが親類から頂いたもので、自動車賃を節約して本郷の自宅へ持ち帰ろうとしたのである。彼の家庭愛の一端をかいま見た感じで、人知れず感心もした。また労働を惜しまない彼の所作は、その後も折にふれ見える気がした。

終戦後から池田内閣誕生まで

私は短期間の四鉄勤務から平和体制の機構改正で昭和二十一年三月、時の鉄道総局長官佐藤栄作氏の強い要請で東鉄経理部長に転動した。四国では不運にも空襲に遭い、至つて身軽な姿になっていたが、周囲の力添えで終戦後の仕事に大いに励むことができた。

大平氏も戦後、経済安定本部公共事業課長や蔵相秘書官等を歴任されていたが、その当時、彼が香川県知事に推されている話を漏れ承り、郷里ではその時から大いに期待を寄せられていたのであった。昭和二十六年九月に米国に出張し、その視察記を収めた『財政つれづれ草』という本を頂いたことがある。大変な勉強家で、この視察は後々も大いに役立つにちがいない。

実は同じ年の夏に私も、米国へ出張を命ぜられた。勤務が公共企業体の日本国有鉄道に変わり、各局代表一名の中に選ばれ、米国鉄道事情（米国は全部私鉄）の視察で、私の課題は資材制度の研究であった。百日間、米国内をあれこれ視察し、米国の偉大さと寛容さを身をもって体得した。物量の豊富さにすっかり感心し、日本の敗戦も当然と思った。帰朝後、報告を纏めて資材制度の改正に役立たせて貰った。

翌二十七年三月、漏電による火災で地方局長転出の予定を急遽、上司の計らいで延期して頂き、経理局

主計課長に就いた。再び大蔵省との接触が深くなり、そのお蔭で大平氏が代議士になった以降も、氏の肝入りで大蔵省首脳とのゴルフ会等にも誘われ、その友情の深さに頭の下がる思いがした。氏は古巣の大蔵省の同僚を大変大切にされ、彼等も殊のほか大平氏を尊敬していた。余談だが、国鉄内部でもずっと主計課長経験者対大蔵省鉄道担当歴代主計官との親睦会があり、時にゴルフ会も催すなど、有意義な集いであった。

官房長官から宰相まで

大平氏が池田内閣の官房長官に就任し、その後、外務、通産、大蔵大臣をされ、また党務では政調会長や幹事長の要職を歴任して、最後は宰相の地位に上った。いずれのポストでも卓越した見識により日本国内は勿論、世界でも非常に高い評価を受けたことは、今更述べるまでもない。しかし、それにしても政界の権力闘争の厳しさが毎日のように報道されていたが、この間の彼の体力を惜しまず力の限りを尽されていた姿は、崇高に見えた。

昭和三十六年、彼の官房長官時代、愛嬢の芳子さんの結婚式に私ども又信会五、六回有志が夫妻でご案内を受けた。その出席者は五回が赤城、増田健次、坂口友雄の諸兄、六回が太田、神原、姫井正義、私であったと思う。立食のご馳走を食べる時間もいまま、奥さん同士が久方ぶりのことで話に夢中になり、遂にお開きになったのち、同窓招待者一同が浅草の料亭で二次会を催した。あれから三十数年経ち、当時の男性出席者は皆不帰の客となり、独り私が残された。世の無常を覚えるとともに、随分高齢になってしまったと思う。

私は昭和四十年頃から大平内閣誕生の時まで又信会の東京副支部長と支部長を務めた。大平氏は、よく出席して下さり、彼の吸引力はまことに大きくいつも盛会で、立派なスピーチをしてくれた。その一つ、

瀬戸大橋の話は印象的で、彼の逝去後、昭和六十三年四月に大橋は完成したが、大平氏にほんとうに見てほしかったと思う。瀬戸大橋は四国の発展にとっては大層な貢献であり、現在新幹線「のぞみ」号では、四時間余で東京から香川県に到着できて、全く隔世の感である。

私の又信会東京支部長時代に大平総理が誕生したので、同支部では大平ご夫妻を招き総理就任祝賀会を催したが、かつてない盛会であり、私は名譽ある祝詞を申し上げることができた。また又信会五、六回合同の全国大会を、大平総理就任祝賀会を兼ねて昭和五十四年初夏に開催した。大阪方の赤城、太田両君と東京方の増田君と私が幹事役を務めた。官邸近くのホテルで開いたが、予めその前に大平氏の好意で総理官邸を見学することになり、奥様同伴の又信会員達は三三五五、官邸の庭で記念写真を撮って頂いたり、態々この日のために出席者全員に各自の氏名を認めた自筆の色紙を記念にと配布された。実に立派を超えた気の遣いように感激した。皆、よい記念と家に飾っているにちがいない。このように氏の友情は言い知れぬものがあった。

その翌年、大平氏は悲壮の死を遂げたが、思えば彼の健在時代が我々にとつても最も華やかな時代であったように思う。

全く駄文であるまいかとひたすら案じながら、長々綴ってみたが、これをもって私の責務を果したく思う。

(元国鉄本社長、元鉄道弘済会理事)